

「伝え合う力」の育成に向けた中学校国語科における 生徒の主体的・対話的で深い学びの充実

室 長 平岡 馨

研究協力員 錦町立錦中学校 教諭 上瀧 匡基

1 研究主題について

研究協力員の所属する錦町立錦中学校の学校教育目標は、「夢を持ち、自ら学び、礼節を重んじる生徒の育成」である。ICT機器を効果的に活用したアクティブ・ラーニングの充実による「自ら学び、自ら考え、表現する力の育成」が教育努力目標となっている。本校には明るくまじめな生徒が多いが、自分の思いをうまく表現できず、好ましい人間関係をつくるのが苦手な生徒も見られる。また、中学校卒業後、管外に進学する生徒もあり、他者とのコミュニケーション能力の育成は本校の課題の一つとなっている。

このことから、本研究における「これからの社会に求められる資質・能力」を管理職と研究協力員との協議の結果、「伝え合う力」と設定した。その上で「伝え合う力」とは、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して適切に表現する力」と定義し、その能力の変容について検証を図ることとした。

2 研究の視点

今回、中学校国語科では、生徒の「これからの社会に求められる資質・能力」として設定した「伝え合う力」の育成に向け、「主体的・対話的で深い学び」を充実させることに取り組んだ。

ここで、「伝え合う力」の育成を目指した主体的・対話的で深い学びを充実するための取組について、三つの視点から述べることとする。

(1) 視点1「学びを引き出す」について

「社会に開かれた教育課程」では、社会と連携・協働しながら、「未来の創り手」となるために必要な知識や力を育むことが求められている。つまり、よりよい社会を創るという目標の実現に向け、生徒にとって学ぶ必要がある「地域と関連した課題」を設定することが重要となってくる。そこで今回は、「錦町人口ビジョン」(H27 錦町作成)を参考に、「錦

町が目指すべき将来の方向性をより多くの町民に理解してもらおう」という「単元を貫く問い」を設定し、相手意識と目的意識を明確化した。

また、「対話的な学び」に欠かせない「対話型言語スキル」の活用も図った。自らの考えを広げ深めるために必要な言語スキルを生徒に示し、使いながら習得できるように工夫した。これは、本校が目指す「伝え合う力」の育成の基盤となるものである。

これらの取組によって、課題解決的な学習過程の中で、豊かなかわり合いのある言語活動が行われ、生徒の「学びを引き出す」ことができると考えた。

視点1の主な手立ては、以下のとおりである。

- ①地域の目指すべき将来の方向性をより多くの人に理解してもらうという課題解決的な学習活動を通して、「主体的な学び」を目指す。
- ②対話型言語スキルを活用し、「対話的な学び」を充実させることで、資質・能力としての「伝え合う力」の育成を目指す。

(2) 視点2「学びを振り返る」について

「主体的な学び」では、自らの学習活動を振り返って、次の学習につなげることが重要となる。具体的には「何をどんな方法で学び、今後はどう生かすのか」「協働し、対話する中で新たに学んだことは何なのか」等を「振り返り」の中でメタ認知することが求められている。

また、学びを振り返るためには、思考過程を可視化することも必要である。自己の思考の変容を可視化することで、よりの確な「振り返り」が行えるようになり、それがメタ認知能力の向上につながると考えられるからである。

同時に、これらの「学びを振り返る」活動は音声言語や文字言語を使って適切に表現する能力も求められることから、「伝え合う力」の育成につながる部分もある。

視点2の主な手立ては、以下のとおりである。

- ③ 思考ツールを活用した板書やワークシートを工夫し、生徒の思考過程がどのように変容したのかが可視化できるようにする。
- ④ 振り返りの場面において、学習内容を振り返るだけでなく、資質・能力についての自己評価も行うことで、「伝え合う力」を意識できるようにする。

(3) 視点3「学びを支える」について

「学びのUD化」とは、生徒が安心して学べる教育環境や人間関係の中で、分かりやすい授業を展開することである。

安心して学ぶためには、互いの立場や考え方を尊重する学級の支持的風土が不可欠であり、それは「伝え合う力」の土台をなすものである。同時に、教師が一人一人の生徒の学びを的確に見取りながら支援することで、生徒同士の対話しやすい雰囲気を作る配慮も求められる。

また、分かりやすい授業を展開するには、ICT機器を効果的に活用する必要がある。資料の提示や学習状況の把握に用い、情報の共有化を図り、生徒の「学びを支える」手立てとしたい。

視点3の主な手立ては、以下のとおりである。

- ⑤ 一人一人の学びを的確に見取りながら支援を行うことで、生徒が対話しやすい雰囲気をつくる。また、ICT活用により情報の共有化を図ることで、日常的にも学級内での「伝え合う力」の育成に努める。

3 「伝え合う力」の検証

(1) 検証の内容

今回、国語科の授業における学習活動を通して「伝え合う力」を育むことを目的とする。前述のとおり、「伝え合う力」を本研究では次のように捉える。

人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して適切に表現する力

この資質・能力について、課題発見・解決の過程の中で行われる「主体的・対話的で深い学び」による生徒の変容を見取ることで「伝え合う力」が育まれたかを検証していくこととする。

(2) 検証の方法

「主体的・対話的で深い学び」による生徒の意識の変容については、「全国学力・学習状況調査」の質問紙調査を活用した意識調査を検証授業の前後に実施し、この結果を比較することとする。

その結果の変容を分析することで今回の研究を検証する。

4 研究の実際

検証授業 錦中学校第1学年
単元名 「本文の根拠となる図表を探しだそう！」
～図表の持つ役割や効果を考える～
(「シカの『落ち穂拾い』」)

(1) 本単元の授業設計

① 付けたい力と生徒の実態

生徒が日々の生活で読む様々な種類の文章には、文学的文章だけでなく、説明や記録の文章も多く存在する。そして、その説明や記録の文章には図表が使われていることが多い。書き手の伝えたい内容をよりの確に読み取るためには、文章と図表の関係性や図表が果たしている役割と効果を理解することが重要である。

本単元は、学習指導要領第1学年読むこと「エ 文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと」を受け、書かれた説明的文章を分析的にとらえ、図表の持つ役割や効果について自分の考えを形成することを学習する。筆者の意図や思考を想定しながら文章全体の構成を把握するとともに、自分の知識や経験などと関連付けながら、自分の考えを明確にしていくことが重要となる。

そこで、本単元で付けたい力を「記録の文章を読み、本文と図表の役割の関連について自分の考えをもつこと」と設定した。

なお、事前の意識調査の結果から、以下のような生徒の実態を把握することができた。

質問項目	肯定評価
国語の授業は、なりたい未来の自分の姿に近づくために役立っている。	91.9%
国語の授業で、「伝え合う力」が高まっている。	64.9%
グラフや表などの資料を、自分の考えを持つために役立っている。	48.6%

難しい課題を解決するときでも、最後まで粘り強く取り組んでいる。	45.9%
授業で何を思ったか、何ができるようになったか振り返っている。	45.9%

ほとんどの生徒が国語の授業の重要性は認識しているものの、授業を通して「伝え合う力」が向上していると実感している生徒は約3分の2である。

また、本単元と関連が深い「図表の活用」や、「主体的な学び」に関する「粘り強さ」「振り返り」については課題が見られることが分かった。

② 学習課題の設定

このような実態を踏まえ、図表の効果や役割について、主体的・対話的に学ぶための手立てが必要と考えた。また、より深い学びとなるために、相手意識や目的意識を明確化した「地域社会と関連した課題」を設定し、生徒に学ぶ必要感を持たせることも重要と考えた。そこで、今回は「錦町が目指すべき将来の方向性をより多くの町民に理解してもらう」ために必要な図表を考え、その工夫や効果について説明するという学習課題を設定した。

③ 「単元を貫く問い」の設定と指導計画

これらを受け、単元を貫く問いを「錦町が目指すべき将来の方向性をより多くの町民に理解してもらうには、どんな図表を用いたらよيدらうか。」と設定し、指導計画を以下の表1のように構想した。

表1 本単元の授業設計

「問い」	次	時	○学習活動と【三つの視点】の関連
	「単元を貫く問い」 「錦町が目指すべき将来の方向性をより多くの町民に理解してもらうには、どんな図表を用いたらよيدらうか。」	第1次	1時
第2次		2・3時	○文章と図表の関係を読み取り、全体の構成や文章の要旨を捉える。 【視点2】思考過程の可視化 【視点3】効果的なICTの活用
		4時	○教科書の文章の図表の役割や効果について、自分の考えをもつ。 【視点1】対話型言語スキルの活用 【視点2】メタ認知を促す振り返りの工夫
第3次	5時(本時)	○「錦町人口ビジョン」を読み、その根拠となる図表を探し、その理由を自分の言葉でまとめる。 【視点1】対話型言語スキルの活用 【視点2】メタ認知を促す振り返りの工夫 【視点3】効果的なICTの活用	

(2) 指導の実際

学習活動	指導上の留意点
1 課題を確認する。	○前時の既習事項を活用させる。
<p>《課題》 文章にふさわしい図表を選び、その理由を伝え合おう！</p> 	
2 与えられた図表の中から、根拠となる図表を選び、自分の考えを整理する。	○タブレットの中に町のデータを数種類入れておき、文章とその根拠となる図表を選ばせる。
<p>【視点3】ICT機器の活用</p> 	
3 班で交流する。	○根拠を明確にして、話し合う。
<p>活動3 他人の考えをグループで交流する。</p> 	
<p>【視点1】対話型言語スキルの活用</p> <ul style="list-style-type: none"> みなさんはどうですか？ それはつまり、…ということですか？ 思いついたのですが… 例えば、何ですか？ 私は、みんなとちがつて… みんなの意見をまとめると、… 	
4 全体で交流し、自分の考えをまとめる。	
5 学びを振り返る。	
<p>【視点2】メタ認知を促す振り返り</p> <p>○3つの視点で振り返らせる。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①授業で身に付いたこと ②友達から学んだこと ③さらに学習したいこと 	

(3) 検証結果と考察

本実践の検証結果とその考察について、以下の3つの観点から述べる。

① 付けたい力の定着状況について

全国学力・学習状況調査(H25 小学校国語A大問4)を使った事後テストでは、表2に示す結果となり、本単元において付けたい力の向上が見られた。

表2 事後テストの結果 (N=37)

項目	正答率	全国平均	比較
読み取った情報を比較して自分の考えをまとめること	54.1%	45.1%	+9.0

また、意識調査も同様の結果となった。(図1)

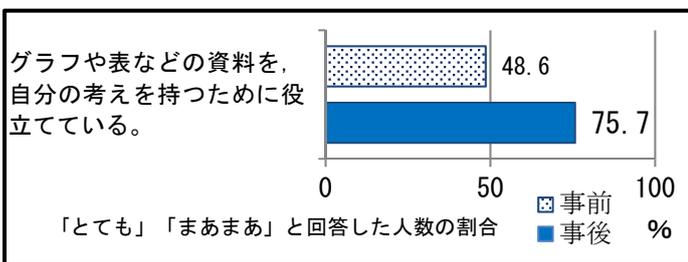


図1 つけたい力に関する意識調査の結果 (N=37)

② 「伝え合う力」の育成について

「伝え合う力」に関するアンケートは、図2に示す結果となった。

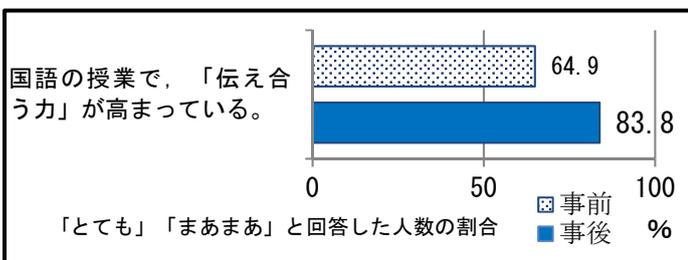


図2 「伝え合う力」に関する意識調査結果 (N=37)

このことについて、授業後の自由記述のアンケートでは、次のような記述が見られた。

自分は、自分の考えを伝えるのがとても苦手だったが、授業を通していろいろと伝えることができてよかった。

聞いている人に分かりやすいように、どのような説明をすれば伝わるのかということを考えたから、「伝え合う力」が身についたと思う。

人の意見を聞いて、自分が考えている意見をもう一度考えて、変えることができたし、なぜそう考えたのかをしっかりと伝えることができた。

また、「伝え合う力」が身に付くためには何が必要かという質問に対しては、図3に示す結果となった。

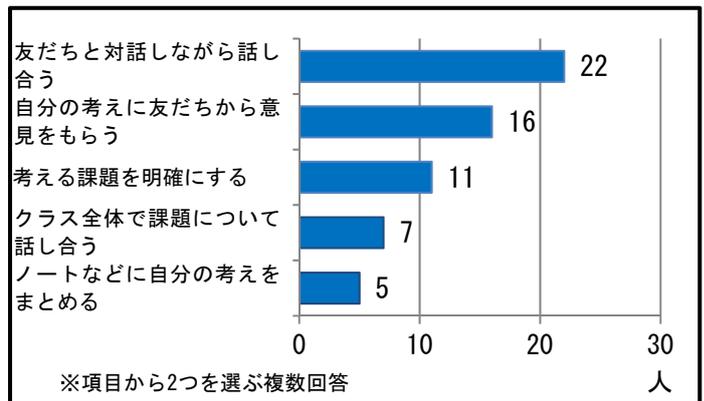


図3 「伝え合う力」に必要と考える要素 (N=37)

③ 研究の視点からの生徒の変容について

ア 研究の視点1「学びを引き出す」について

前述の図3の「考える課題を明確にする」ことを生徒が重視していることから、「単元を貫く問い」を身近な地域の課題にしたことが生徒の学ぶ意欲の向上に有効であったと考えられる。

また、今回は選べる図表を2つに制限したことで、なぜそれを選んだのかという対話の必然性が生まれた。そのことが「友だちと対話しながら話し合う」という豊かなかわり合いのある言語活動を生み出し、生徒の有用感を高めたと考える。

イ 研究の視点2「学びを振り返る」について

研究の視点2「学びを振り返る」に関するアンケートは、図4に示す結果となった。

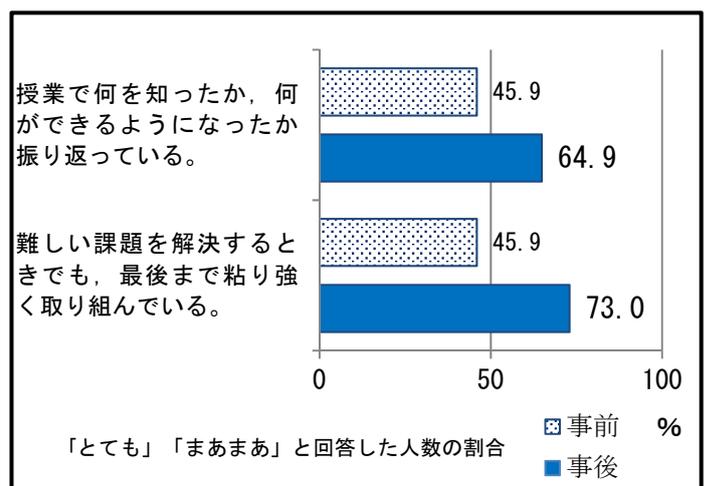


図4 研究の視点2に関する意識調査結果 (N=37)

この結果から、「振り返り」の視点を明確に示したことや、思考の過程を可視化するワークシート等を工夫したことは、生徒の「主体的な学び」を促すことに有効であったと考える。

ウ 研究の視点3「学びを支える」について

今回は、ICT機器の効果的な活用を目指した。一人1台ずつタブレットを所持して授業を展開できたことは、情報の共有化が図られ、生徒の「学びを支える」手立てとして有効であったと考える。

特に、生徒の考えを瞬時に集約し、電子黒板に表示したことは、思考の可視化というメリットだけでなく、教師の個別の支援にも有効であり、「学びのUD化」が促進されたと考える。

5 研究のまとめ

今回、「伝え合う力」の育成に向けた生徒の主体的・対話的で深い学びの充実を目指し、検証授業を行った。

まず、研究の視点1「学びを引き出す」については、実生活との関わりを重視した学習課題を設定したことにより、生徒の学ぶ意欲が高まったと考える。同時に、言語活動の充実に向けて「対話的な学び」となるためには、「対話型言語スキル」の育成が不可欠であり、それが「伝え合う力」の育成の基盤となることも分かった。今後は、関連する複数の単元を貫く統一的な「問いの工夫」や、現代の社会問題や自己の在り方生き方に関わるような学習課題の設定などを工夫し、「対話的な学び」を充実させることで「伝え合う力」の育成につなげたい。

次に、研究の視点2「学びを振り返る」については、振り返りの視点の明確化と生徒同士の対話的な振り返りにより、生徒が自分の学びを自覚することができるようになったと考える。特に、「次にどう生かすか」という質問に関しては、八割以上の生徒が「図表を使って具体的な説明を行いたい」と答えており、図表の効果や役割を認識したうえで、それを実際に他の領域で活用したいと考えていることが分かった。

また、思考過程の可視化については、一定の観点に沿ってお互いの考えの根拠を話し合うことが重要であると考え。それにより、互いの思考の共通点や相違点が明確になり、その後の合意形成や課題解決がスムーズになるからである。さらに、そのような活動自体が「伝え合う力」の育成につながる面もあり、今後さらに具体的な方策を検討したい。

最後に、研究の視点3「学びを支える」について

は、教師が一人一人の生徒の学びを的確に見取りながら支援することで、生徒の主体的・対話的で深い学びが充実したと考える。具体的には、生徒の思考が停滞している場合は検討の視点を示したり、生徒からの複数の意見を関連付けたり、生徒の考えに適切な価値づけを行ったりすることである。「活動あって、学びなし」とならないためには、教師の役割は重要である。今後は、カウンセリングやコーチングといった心理的な対人関係技法の習得も視野に入れながら、「学びのUD化」を進める必要があると考える。

これらのことから、今回の検証授業において、「主体的な学び」と「対話的な学び」の充実については概ね有効な結果となり、そのことが「伝え合う力」の育成にもつながったと考える。

今後の課題としては、「深い学び」の実現に向けた授業改善の在り方の検証が残されている。その指標となるのが、中教審の「審議まとめ」に示された「考えを形成し深める力」（「情報を編集・操作する力」「新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」「新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力」等）ではないかと考える。この能力をどのようにして育成するのか、国語科独自の「言葉による見方・考え方」を踏まえながら、今後検証を重ねていきたい。

《参考文献》

- ・文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説国語編』
- ・国立教育政策研究所（2016）『資質・能力〔理論編〕』
- ・中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（2016）「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」